DOI 10.18995/24344710.10.1

論　文（査読付）

ハーバーマスの「左翼ファシズム」発言とデモクラシー論

飯島　祐介

Habermas's Criticism of the Student Protest Movement as Left-Wing Fascism and His Theory of Democracy

IIJIMA Yusuke

Abstract

It is well known that Habermas criticized the student protest movement of the 60's as left-wing fascism. This paper explores how this criticism was founded on his theory of democracy, and how the experience culminating in this criticism conversely influenced his theory of democracy. The main findings of this paper are as follows. Firstly, Habermas expected the students to realize the participation in the public sphere within organization, which was laid out in The Structural Transformation of Public Sphere as a solution to the problem of decline of public sphere. Secondly, radicalized students came short of his expectation, which was one of the reasons why Habermas cut a road to the Theory of Communicative Action.

1．問題設定

1967 年 6 月 9 日にハノーファーで「大学とデモクラシー――抵抗の条件と組織」が開催された。この集会は、6 月 2 日西ベルリンでデモ中に射殺された大学生ベンノ・オーネゾルクの葬儀に際して開かれたものであった。この集会のメインスピーカーの一人として招待されていたユルゲン・ハーバーマスに対して、ハンス＝ユルゲン・クラールとともに異議申し立て運動のリーダーであったルディ・ドゥチュケが批判を展開した。ハーバーマスは、会場を後にしようと車に乗ったところで思い直して引き返し――ドゥチュケはすでに立ち去っていたが――、次のように発言した。

> ドゥチュケ氏が具体的な提案として言うことは、座り込みストライキが行われなければならないということだけである。このストライキは、非暴力的手段を用いたデモンストレーションである。なぜ彼はそう言わないのか、なぜ彼は 45 分を費やして主意主義的なイデオロギーを展開するのか。このイデオロギーは、1848 年に空想的社会主義とされた

ものであり、今日の状況では――少なくともこの術語を持ち出す理由があると信じるが――「左翼ファシズム」と言わなくてはならないものである。（Habermas [1969]2008c: 147-8）

このようにドゥチュケを、ひいては異議申し立て運動を、「左翼ファシズム」と痛烈に批判する発言は、大きな波紋を広げることになった。そして、異議申し立て運動の時期のハーバーマスの知識人としての活動を論じる際には、必ずと言ってよいほど言及されるエピソードとなっている[1]。

本稿では、このハーバーマスの「左翼ファシズム」発言が彼のデモクラシー論によってどのように基礎づけられていたか、またこの発言を頂点とする経験が逆に彼のデモクラシー論にどのような影響を及ぼしたかを明らかにしたい。言い換えると、「左翼ファシズム」発言の理論的背景と発言を頂点とする経験の理論的帰結を、デモクラシー論に焦点を合わせながら解明すること、これが本稿の課題である。

以下、本稿ではまず、「左翼ファシズム」発言にいたる状況を簡潔に再構成したうえで、関連する先行研究の見解をまとめ、そのなかに本稿を位置づける（第２節）。そのうえで、発言の理論的背景について（第３節）、また発言を頂点とする経験の理論的帰結について（第４節）、明らかにする。

２.「左翼ファシズム」発言をめぐって

（１）発言にいたる状況

独裁で知られていたパフラヴィー朝イラン第二代国王モハンマド・レザー・パフラヴィーがドイツ連邦共和国を訪問していた 1967 年 6 月 2 日夜、西ベルリンでは学生とイランの反体制派によるデモが行われていた。このデモの最中、26 歳の大学生オーネゾルクは、私服警官――後にドイツ民主共和国（DDR）の諜報員であったことが判明する――によって背後から射殺された。翌 3 日から抗議のデモが連邦共和国で吹き荒れる中、オーネゾルクは出身地のハノーファーで 6 月 9 日に埋葬された。「大学とデモクラシー――抵抗の条件と組織」は、この際に開かれた集会であった[2]。ハーバーマスは、この集会にヴォルフガング・アーベントロ

[1] 本稿では「左翼ファシズム」発言をめぐるハーバーマスの言動や彼の置かれた状況については、Müller-Doohm（2014）や Wiggershaus（2004）を参照した。

[2] 集会を記録した冊子には、次のように注記されている。「集会「大学とデモクラシー――抵抗の条件と組織」は、1967 年 6 月 9 日にハノーファーの体育館で開催された。西ベルリン、連邦共和国、そして外国から来た 5000 人の学生と教授が深夜まで、社会民主主義を擁護し再生し保護する可能性について議論した」（Bergmann Red. 1967: 147）。

ートやマルゲリータ・フォン・ブレンターノ等とともに招待されていた[3]。

ハーバーマスは、この集会のスピーチで「連邦共和国における学生の政治的役割」について、次のように述べる。

> 学生の異議申し立てはしばしば、公的な機関が意図せずにあるいは故意に、市民の政治的意識にのぼらないように、また場合によっては意識から排除さえしているものを、はじめてあますところなく意識させる。私の見立てでは、学生の異議申し立ては、補正の機能を有する。さもないとデモクラシーに組み込まれた統制のメカニズムは作動しない、あるいは十分には作動しないからである。（Habermas [1969]2008b: 140）

このようにハーバーマスは、異議申し立て運動を連邦共和国のデモクラシーの内部で「補正の機能」を有するものとして位置づける。そのうえで、「反対派の学生に課される厳しい制限を私は認める」として「行動主義（Aktionismus）」を間接的にけん制するが、ただちに「その点に立ち入ることはできない」と続けることで、学生たちへのシンパシーを隠さなかった（Habermas [1969]2008b: 142）。

このスピーチは、ハーバーマスからすると、学生たちへの期待を率直に語ったものであっただろう。当時、1966 年の大連立政権の形成によって議会内に野党が実質的に不在となった状況で、議会外野党（APO; außerparlamentarische Opposition）の重要性が認識され主張されていた。したがって、運動に「補正の機能」を割り当てることは、それを過少に評価することでは決してなかったはずである。しかし、学生からすると運動を既存の体制の「補正の機能」に言わば切り詰め矮小化するものとして受け止められうる。ドゥチュケの反応はそうしたものであった[4]。彼は、「ハーバーマス教授からすると、いまだマルクスと同じように、「思想が現実に迫ることだけでは十分ではなく、現実が思想に迫らなければならない」ことになるのだろう」として、ハーバーマスの現状認識に疑義を差し向ける（Dutschke 1967: 78）[5]。ドゥチュケからすると、「私たちが歴史を作ることを可能にする、物質的な前提は、す

---

[3] 集会のはじめに、クラウス・メッシュカートは、来場している教授の「名前をすべて挙げることはしないが」と断りながら、アーベントロートに次いで 2 人目にハーバーマスの名前を挙げている（Meschkat 1967: 15）。

[4] ドゥチュケに先立ってクラールは討論で、行動主義をけん制するハーバーマスを批判し、「挑発」や「永久的な学生反乱」は必要であると主張する（Bergmann Red. 1967: 71）。これに対して、ハーバーマスは、そうした主張の真意や内実を問いただしたうえで、「挑発」が「ファシズム的な含意」をともないうることに、また（「永久的な学生反乱」における）「学生投票によるコントロール（plebiszitäre Kontrolle）」が「教授の自由の解体」を含意しうることに警鐘を鳴らしている（Bergmann Red. 1967: 75-6）。

[5] 人間は今や歴史を作ることができる段階に達していると、ひいては革命前夜にいると、状況を誤認して

でに用意されている」（Dutschke 1967: 78）。すなわち、「生産力の発展は、飢え、戦争、支配の撲滅を物質的に可能とする段階に達している」のである（Dutschke 1967: 78）。今や「すべては、人々の自覚的な意志にかかっている」（Dutschke 1967: 78）。ここで、ドゥチュケは、「ハーバーマス教授、あなたの理解力に欠ける客観主義は解放されるべき主体を打ちのめすのです」と、ハーバーマスを批判する（Dutschke 1967: 78）。そのうえで、ドゥチュケは、歴史を作る意志を挫こうとする「警察のテロ」に抵抗する「ふさわしい行動形態」が必要であるとした。「典型的な警察のテロによって、いわゆる首謀者の処罰と放校によって、学生の反対派を排除する傾向は、第二次世界大戦後のドイツにおける民主的な意識の最重要の萌芽に対する攻撃と見なさねばならないし、ふさわしい行動形態で応じなければならない」（Dutschke 1967: 81）[6]。このようにして表出された行動主義的な姿勢に対して、ハーバーマスは、いったんは会場を後にしようと車に乗り込んだが、思い直して引き返し、ドゥチュケの立場を「左翼ファシズム」と批判したのであった[7]。

いるというのは、ハーバーマスが学生を批判する際に繰り返される論点となった。この批判は、ハーバーマスの理論と実践との関係をめぐる基本的立場を反映している。ハーバーマスは、『理論と実践』（1963年）に所収された論文「哲学と科学の間――批判としてのマルクス主義」で、「可能な歴史の主体」をまずは「仮構（Fiktion）」であるとする。人間は、この「仮構」を通して、実際にそのようなものに高まりうるというのが、彼の立場であった。「この仮構の望楼からは、状況は実践的な介入の影響を受けやすいアンビバレントなものとして現れる。こうして、蒙を開かれた人間は、はじめはただ仮構されたに過ぎないものへと、自己を高めることができる」（Habermas 1963b: 214=1999: 320-1）。このような立場からすると、学生たちは「仮構」のプロセスを省略し、現実の主体を「可能な歴史の主体」へと短絡していることになろう。ここでのドゥチュケの疑義は、こうしたハーバーマスの立場やそれを反映した学生たちへの批判的な眼差しに向けられたものであった。

[6] この直前で、ドゥチュケは、次のように述べることで、言論ではなく暴力が問題であることを強調している。「私たちに対してマスメディアの疑似公共性が動員されることは避けられないが、それほど重要ではない。私たちは、シュプリンガー社を通して自分を定義してはならない。私たちのかたわらで力をふるっているのは、ただ警察的、官僚的暴力である。ここ数週間の間に日を追ってベルリンのキャンパスに、こうした暴力が感じとられた通りである。彼らは、この暴力を遅かれ早かれ再び使用するだろう」（Dutschke 1967: 81）。「疑似公共性」という言葉の選択からも示唆されるように、ここにはハーバーマスに対する間接的な批判が含意されていると考えられる。

[7] 「左翼ファシズム」発言に対する異議申し立て運動側の反応は反発だけではなかった。ハンス・ディーター・ミュラーとギュンター・ホフマンのドキュメント映画「静寂を切り裂く（Ruhestörung）」に収録された音源では、「左翼ファシズム」発言の直後、ブーイングだけでなく拍手も聞こえる（Müller und Hörmann 1967）。また、発言に対する反発はあるとしても、なおハーバーマスに期待する人たちもいた。ハイデルベルク大学時代からのハーバーマスの助手であったオスカー・ネークトは、その一人である。『左翼がユルゲン・ハーバーマスに答える』（1968年）の編者であるネークトは、ハーバーマスが同

年表

1966	12	1	クルト・ゲオルク・キージンガー（CDU）を首相とする大連立政権の形成（SPD の政権参画）
1967	6	2	ベルリンで大学生ベンノ・オーネゾルクがデモ中に射殺される
	6	9	ハノーファーで集会「大学とデモクラシー」開催（ハーバーマスの「左翼ファシズム」発言）
	9		ハーバーマスのニューヨーク滞在（New School for Social Research のテオドール・ホイス講座／1968 年 2 月まで）
1968	1	31	テト攻勢開始
	2	17-18	ベルリンで「国際ベトナム集会」開催
	4	4	マーティン・ルーサー・キング・ジュニアが米・メンフィスで暗殺
	4	10	ルディ・ドゥチュケが西ベルリンで銃撃される
	5	28	フランクフルトで集会「デモクラシーの緊急事態」の開催
	5	30	非常事態に関する基本法が連邦議会で可決
	8	20	ワルシャワ条約機構軍がプラハに侵攻
	10	14-15	ズーアカンプ社での共同決定の要求を発行者ウンゼルトの立場にたってハーバーマスは拒絶
	12		学生がフランクフルト大学社会研究所を占拠（アドルノは警察に出動要請）
1969	8	6	アドルノ死去
	10	22	ヴィリー・ブラント（SPD）を首相とする SPD と FDP の連立政権の形成
1970	2	13	ハンス＝ユルゲン・クラールが交通事故死

（２）発言をめぐる諸研究

この「左翼ファシズム」発言を頂点とする、異議申し立て運動の時期の知識人ハーバーマ

書への返答論文の寄稿を断ったことは運動との断絶を意味しないとする。むしろ、それが意味するのは逆の事態であると、次のようにややアクロバティックに主張する。「ユルゲン・ハーバーマスは、異議申し立て運動への態度を公にする前から、長い間、躊躇していた。であるから、彼がこの本でもともと予定されていた返答を断念したという事実は、以前と変わらず、彼が自身のテーゼを新左翼の内部での基本的な立場をめぐる議論に貢献するものと考えていることを示す」（Negt [1968]2016: 91）。このアクロバティックな面がないとは言えない主張には、「左翼ファシズム」発言やそれに続く「えせ革命（Scheinrevolution）」発言（後述）に強く反発しながらも、ハーバーマスへの期待を断念することができない、ネークトの立場がうかがわれる。

スについては、なお十分ではないかもしれないが、すでに多く議論されている。伝記的な事実については、Wiggershaus（2004: 71-97）や Müller-Doohm（2014: 187-215）が詳しい。さらに、この時期の知識人ハーバーマスを、彼が展開してきた理論やその背景となる思想との関連で捉え直す試みも積み重ねられている。しかし、これらの試みは、知識人としての活動の理論的背景に光をあてているとしても、逆にその経験が理論や思想に及ぼした影響を必ずしも視野に収めていない。また、理論的背景に注意が向けられる際に、その焦点は彼のデモクラシー論には必ずしも合わせられていない。

マーティン・B・マトゥシュティクは、「彼が成熟したのは、断固としてファシズムに反対する新しい感性を備えた戦後の環境である」ことを強調する（Matuštík 2001: 91）。そのうえで、ハーバーマスの思想の反ファシズムの側面に注目する。ハーバーマスは、学生運動を反ファシズムの思想を体現するものとして、まずは評価したとする。「ハーバーマスは、真正の新しい反ファシズムの感受性を西ドイツの文化的エートスに吹き込んだとして、学生運動を評価する」（Matuštík 2001: 92）。しかし同時に、この反ファシズムの思想は、連邦共和国の基本法を中心とした制度的秩序を護持しようとする主張にもなったとする。「ハーバーマスは、ファシズムの継続という誤りを破壊することを擁護するが、同様に戦後の基本法で規定されたデモクラシーの新しい制度的秩序を維持することを主張する」（Matuštík 2001: 93）。ハーバーマスは、学生運動が戦後の制度的秩序を脅かすほどにラディカルである場合には、それを批判したとする。「あたかも本能的に、彼は学生のラディカリズムから引き下がり、かわりに民主的な手続きやリベラルな自由、そして基本法を制度的に保つことを求める」（Matuštík 2001:93）。このようにラディカルであることと保守的であることが交錯する反ファシズの思想は、ハーバーマスの理論展開全体の通奏低音である。「「歴史のバランスをとる感覚」を導入すること」は、「ハーバーマスの生涯の仕事」に他ならない（Matuštík 2001: 91）。それゆえに、この思想は個々の時期の知識人としての活動経験によって変化する変数ではない。そのため、マトゥシュティクの視界からは、知識人としての活動経験がその背景となった理論や思想にいかなる反作用を与えたかという問題は脱落する傾向にある。

ロバート・C・ホルブは、この時期の知識人ハーバーマスの言動を「デモクラシーと学生運動――左翼との対話」と題された章で論じる（Holub 1991: 78-105）。しかし、ホルブがまず目を向けるのは、ハーバーマスのデモクラシー論というより、彼の思想のマルクス主義的側面である。ホルブは、「ハーバーマスは、1960 年代のほとんどの時期において非正統的なマルクス主義の伝統の重要な代表者と見られてきた」（Holub 1991: 79）とする。そのうえで、この「非正統的なマルクス主義の伝統」の立場から、教条主義に傾くかぎりでの学生たちを批判したとする。「学生たちに対する彼の批判は、学生たちが第三世界の服従のみならず西洋の先進国の社会的なダイナミクスも、あまりに機械的に、またあまりに狭く捉えているという彼の信念に最終的には基づいていた」（Holub 1991: 105）。ハーバーマスが正統的なマルクス主義に対して「民主主義的な代替案」を考えていたとするホルブは、たしかにハーバーマスのデモクラシー論を視野に収める。しかし、その内実に踏み込んで、そこからハーバーマスの活動を捉え直すにはいたっていない。

マテュー・G・スペクターも同様である。彼は、ハーバーマスの理論や思想に立ち戻る際に、そのテクノクラシー批判の側面に目を向ける（Specter 2010: 87-132）。ハーバーマスは、この批判の眼差しのもとで、テクノクラシー化する大学に民主化を要求した学生たちを支持したとする。そして逆に、学生たちをその「行動主義」においてかえってテクノクラシー化していると批判したとする。「ハーバーマスは、学生の世界観では制度が「閉じられた自己調整的なシステム」になっているとして、敵対する両者をひとまとめにする。そして、テクノクラティックな保守主義の世界観とラディカルな学生たちのそれを合成する。実際、彼はあるところで口を滑らせ、学生の活動家を直截に「テクノクラート」と呼んだのである」（Specter 2010: 114）。テクノクラシーに対してデモクラシーが対置されていたとするかぎりで、スペクターもハーバーマスのデモクラシー論を視野に収める。しかし、ホルブと同様に、その内実に踏み込んで、そこからハーバーマスの活動を捉え直すにはいたっていない。

異議申し立て運動の時期の知識人ハーバーマスを彼のデモクラシー論を背景に捉え直すこと、そしてその経験が逆にデモクラシー論に及ぼした影響を測定することの意味は、小さくないだろう。まず前者は、この時期の知識人ハーバーマスの活動をより精密に理解することにつながる。彼の活動は、大学改革に関する具体的な論評や提案を中心としていた。この論評や提案は、とくに大学の民主化をテーマに展開されており、彼のデモクラシー論と密接に結びついていたのである。また後者は、ハーバーマスのデモクラシー論の言わばミッシング・リンクを明らかにすることにつながる。ハーバーマスは、『公共性の構造転換』（1962年）と『事実性と妥当性』（1992年）で、デモクラシー論を明示的に展開する。しかし、『コミュニケイション的行為の理論』（1981年）を到達点とする1960年代後半から1980年代はじめにかけての時期は、デモクラシーについて理論的には正面から論じていない。この意味で、ハーバーマスのデモクラシー論には、ミッシング・リンクというべきものがある。異議申し立て運動の時期の経験がハーバーマスのデモクラシー論に及ぼした影響を測定することは、このミッシング・リンクの発見に貢献しうる[8]。

本稿は、以上の考えから、とくに「左翼ファシズム」発言に注目して、この発言が彼のデモクラシー論によってどのように基礎づけられていたか、また逆にこの発言を頂点とする経

[8] 1960年代後半から80年代はじめにかけてハーバーマスの理論形成に影響を与えた経験は、学生を中心とした異議申し立て運動の興隆だけではない。この運動が下火となった70年代、ドイツ赤軍のテロリズムが頻発しそれを背景としたいわゆるドイツの秋が訪れるが、これもまた重要な経験である。理論の水準ではニクラス・ルーマンとの論争も彼の理論形成に影響を与えていることは、論を俟たない。『コミュニケイション的行為の理論』にいたる道程は、これらのさまざまな要素が結節点となっている幾多の経路の複雑な絡まりあいによって織りなされている。本稿は、その絡まりあいの中から異議申し立て運動という一つの経験に注目し、それをとくに『公共性の構造転換』のデモクラシー論の延長線上に位置づけ、その影響を測定するものである。したがって、本稿は、ミッシング・リンクの発見に貢献するとしても、この時期のハーバーマスの理論形成の全体像を再構成するものではなく、ひとつの経路を、またその一部を明らかにするにとどまる。

験が彼のデモクラシー論にどのような影響を及ぼしたかを明らかにしたい。

3．発言の理論的背景

（1）集会への参加の背景

「左翼ファシズム」発言がなされたのは、「大学とデモクラシー――抵抗の条件と組織」であった。この集会に参加していなければ――いずれ同様の発言にいたった可能性は高いとしても――、さしあたって発言はなかったことになる。では、そもそもなぜハーバーマスは集会に参加していたのか。

それはまず、異議申し立て運動がハーバーマスに期待していたからである。社会主義ドイツ学生同盟（SDS）の意見書（1961 年）を拡張した『民主主義のなかの大学』（1965 年）で、著書のクラウス・オッフェやウルリッヒ・クラウス・プロイス等が協力に謝意を表明した数少ない教授の一人がハーバーマスであった（Wiggershaus 2004: 76）。

こうした運動側の期待は、一方的なものではなかった。ハーバーマスもまた、運動に期待していた。ハーバーマスは、『民主主義のなかの大学』に序文を寄稿していたし、彼のフランクフルト大学における最初の助手（社会学）は、ベルリンの SDS に所属していたオッフェであった（Wiggershaus 2004: 76）。

ハーバーマスが運動の中心にいた学生たちに期待したのは、大学の民主化に果たす役割、またその民主化された大学で果たす役割であった[9]。ハーバーマスは、1967 年 1 月のベルリン自由大学での講演を活字化した時評で、「必要な単純化をすれば、学生たちの政治的役割、つまり教育の再組織と大学全体の民主化が重要である。ベルリンはそのモデルケースである」と述べる（Habermas [1969]2008a: 109）。ここで民主化とは、大学の運営に、教授だけでなく、助教授や助手、そして学生が参加することを意味していた。いわゆる正教授大学（Ordinarienuniversität）からグループ大学（Gruppenuniversität）への転換であり、大学における共同決定（Mitbestimmung）の実現であった。「教授する者が学習する者とともに作

[9] 異議申し立て運動は、大学改革だけではなくベトナム戦争や緊急事態法制、さらにマスメディア、とくにシュプリンガー社のあり方を問題化していた。大学改革にしても、その論点は、正教授大学をめぐる組織上の改革だけではなかった。むしろ、学生数の増加に対応した大学の新増設や学修上の改革（在籍年数の制限など）などが論点になっていた。ハーバーマスがこれらの問題を無視したわけではない。しかし、異議申し立て運動は大学改革を中心に、そして大学改革は正教授大学をめぐる組織上の改革を中心に、捉えられることが多かった。後者の点については、ステファン・ミュラー・ドゥームが次のように述べている。「大学改革がハーバーマスに意味することは、根本的にはひとつしかない。民主化である。そして、このことは次のことを意味する。学術的な意思決定機関は、教育のプロセスと研究のプロセスに責任を負う、すべての人に開かれていなければならないということである。とりわけ、大学という空間で下される決定のうち政治的な意味や生活に関わる意味をもつ決定は、開かれた討論と民主的な意思形成の結果でなければならないというのである。」（Müller-Doohm 2014: 187）

り上げる偽りの共同体である正教授大学は、コーポラチオン（Korporation）に置き換えられなければならない。このコーポラチオンの運営機関には、当事者である三者がすべて関与し、その特別の関心を代表する可能性を保証されなければならない。この三者とは、学生、中間層、教授である」（Habermas [1969]2008a: 131）。

ハーバーマスがそもそも「大学とデモクラシー」に参加していたのは、彼と運動の双方の期待が、このように――実際には「左翼ファシズム」発言があからさまにしたようにすれ違いを内包しながら――重なり合っていたことがある。

（2）発言のデモクラシー論的基礎

しかし、集会への参加は、「左翼ファシズム」発言の前提条件に過ぎない。この発言がなぜなされたのかについては、さらなる探究を要する。ドゥチュケの発言は、むろんあからさまに暴力を呼びかけたものではなかった。それに対して、「ファシズム」という連邦共和国においては高度に否定的な表現を用いることは、度が過ぎているようにも思われる。ハーバーマス自身も後に、「いささか場違い発言」と回顧している（Habermas 1981c: 519）。では、「ファシズム」という表現は、なぜ用いられたのか。この謎は、ハーバーマスのデモクラシー論とそれを支える哲学的見地に立ち返ることで解かれうる。彼のデモクラシー論からすると、学生を中心とする異議申し立て運動は高い意義を有する。そして、そのデモクラシー論を支える哲学的見地からすると、それゆえに潜在的には危険なものであった。ドゥチュケの発言は、この危険の顕在化を示唆するものであった。ここに強い危機感が生じ、度が過ぎているようにも思われる対応がなされた、このように理解することができる。

順に詳しく見ていこう。ハーバーマスのデモクラシー論からすると、学生を中心とする異議申し立て運動は高い意義を有する。学生たちの貢献が期待される大学の民主化には、彼のデモクラシー論からすると、デモクラシーそれ自体の可能性が賭けられていたからである。『公共性の構造転換』（1962 年）に立ち戻ってみよう。同書が最終的に直面した問題は、社会国家を前提とした公論の可能条件であった。この問題に対する、同書の最終的な回答は、組織内の公共性への私人の参加であった。大学の民主化は、この回答を大学という組織で具体化するものに他ならなかった。大学の民主化は、いわばモデルケースであり、大学をこえてデモクラシーそれ自体の可能性を射程に収めていたのである。

もう少し詳しく見てみよう。『公共性の構造転換』は、国家と社会の二元論の地平のもとで――最終的にはその失効を踏まえるという否定的なかたちではあるにせよ――展開される。市民的な公共性は、それ自体としては支配せず、公論を創出し支配を理性化する。この市民的な公共性は、国家から分化した社会に形成されるのであった。しかし、この分化とともに形成された自由主義的法治国家が社会国家へと変形するなかで、国家と社会は脱分化の傾向を強める。国家と社会の二元論は失効する。かつての市民的な公共性は組織をアクターとしたコミュニケーション領域へと変容し、そこから締め出された私人が形成するコミュニケーション領域から切り離され、批判的公開性を喪失する。しかし、社会国家への変形は、認容されるべきであった。ここに社会国家を前提とした公論の可能性が最終的に問われることに

なった。この問題に対する、ハーバーマスの回答は次のようなものであった。

> これに対して、厳密な意味で公共的である意見が生み出される可能性は、二つのコミュニケーション領域が、あのもうひとつの公開性、すなわち批判的な公開性によってどの程度媒介されるかということにのみ依存する。もちろん今日では、こうした媒介は、組織内の公共性を経由する公式のコミュニケーション過程に私人が参加するということを通してのみ、社会学的に意味のあるスケールで可能になる。（Habermas [1962]1990: 357=1994: 333-4）

すなわち、組織内の公共性へ私人が参加すること、これがハーバーマスの回答であった。この参加を通して、私人たちは組織をアクターとしたコミュニケーション領域に言わば間接的に参加する。こうして、私人が形成するコミュニケーション領域の批判的意見は、組織をアクターとしたコミュニケーション領域へと流入することになる。組織をアクターとしたコミュニケーション領域の批判的公開性は、こうして再び確保される。社会国家を前提とした公論の可能性は、ここに見出される。

大学の民主化は、組織内の公共性への私人の参加を大学という組織において具体化するものであり、そのモデルケースというべきものであった。大学の民主化には、大学をこえてデモクラシーそれ自体の可能性が賭けられていたことになる。ハーバーマスのデモクラシー論からすると、学生を中心とする異議申し立て運動は高い意義を有するのである。

（３）発言の哲学的基礎

しかし、ハーバーマスのデモクラシー論を支える哲学的見地からすると、異議申し立て運動は高い意義を有するからこそ、潜在的には危険なものであったと考えられる。ハーバーマスが市民的公共性を核にデモクラシー論を構成した基礎には、フリードリヒ・シェリングに由来する独特の哲学的見地があると考えられる[10]。ハーバーマスは、「否定的なものの構造」をめぐるシェリングの思想を次のようにまとめる。

> 誤謬はきわめて才気にあふれながら虚偽でありうるから、それは精神の欠如に存するのでは決してない。むしろそれは倒錯した精神であり、真理の欠如ではなくそれ自体肯定的なものである。およそ精神は、悟性の欠如から生じた悟性であり、狂気を基礎とする。とい

[10] ハーバーマスの学問的営為の出発点は、シェリング論にあった。ボン大学に提出された博士論文「絶対者と歴史――シェリングの思惟における分裂について」（1954 年）は副題にある通り、シェリング論であった。『理論と実践――社会哲学論集』（1963 年）にも、シェリング論（「唯物論への移行における弁証法的唯物論――「神の収縮」というシェリングの思想からの歴史哲学的推論」）が収められている。しかし、ハーバーマスのデモクラシー論の基礎にシェリングに由来する哲学的見地があるというテーゼは、別途、論証されなければならない。飯島（2019）はその試みのひとつである。

うのも、狂気を内にもたない人間は空虚で不毛な悟性の持ち主だからである。私たちが悟性と呼ぶもの、すなわち自発的で活動的な悟性は、実際には規制された狂気に他ならない。徳にも同じことが言える。我意がまったくないなら、徳は無力なままであり何も成し遂げない。（Habermas 1963a: 123=1999: 181-2）

こうした思想は、さしあたっては（ハーバーマスが再構成したかぎりでの）シェリングのものである。しかし、ハーバーマスがこの思想を引き継いでいる可能性は高い[11]。そうであるとすると、彼のデモクラシー論が市民的な公共性を核に構成された理由も明確となろう。上記の引用にある通り、「自発的で活動的な悟性」が「規制された狂気」であるなら、それは「狂気」を排除するものではない。「狂気」は排除されるのではなく、規制されなければならない。支配は「狂気」であるとしても、それを排除するのではなく規制することが重要となる。公論を創出し支配を理性化する市民的な公共性とは、まさにこの規制の機能を担うものに他ならなかったと考えられる。

では、シェリングに由来する哲学的見地がデモクラシー論の基礎にあるとすると、学生を中心とする異議申し立て運動はどのように現れるか。それはまず、「自発的で活動的な悟性」であろう。そして、そうであるかぎりで、「規制された狂気」となる。「規制された狂気」は、「狂気」へと転落する危険性を常にすでに潜在していることに注意しよう。運動は、「自発的で活動的な悟性」であるからこそ「規制された狂気」であり、「狂気」へと転落する危険を常にすでに潜在させている。

ドゥチュケの発言は、この潜在的な危険の顕在化を示唆するものであったと考えられる。ここに強い危機感が生じ、度を越えていたかもしれないが、「ファシズム」という表現が用いられた、このように理解することができよう。

4．発言を頂点とする経験の理論的帰結

逆に、「左翼ファシズム」発言を頂点とする経験は、彼のデモクラシー論にどのような影響を及ぼしただろうか。この発言の直接的な背景となった強い危機感からは、「狂気」への転落を抑止するために、規制を強めることが求められよう。規制の強化はまず、学生たちへの批判として現れる。「左翼ファシズム」発言はその端緒であった。ハーバーマスは、この発言が引き起こした反発にひるまず、翌 1968 年には、緊急事態法制をめぐって運動が急進化するなかで、「えせ革命とその子どもたち」という刺激的な言葉で批判を重ねる（Habermas [1969]2008d）。ハーバーマスは、「自分たちの活動空間は、革命的な状況によって、そうでは

[11] 少なくとも 1970 年代以前のハーバーマス理論は、博士論文以来のシェリング論の影響の元にあると考えられる。ハーバーマス理論のシェリング主義の先駆的な業績である Keulartz（[1992]1995）は、『コミュニケイション的行為の理論』（1981 年）にまで及ぶ影響を、むしろ同書にこそその影響を、読み取ろうとしている。

なくても革命の勃発へと向かっている状況によって規定されている」という学生や生徒の「誤解」を取り上げたうえで、「革命的な状況というには、何もかもが欠けている、これまでに広く受け入れられた、その兆候さえもおよそ欠けている」と断言する（Habermas [1969]2008d: 196）。そして、最後には「異議申し立て運動は、現実的でなければならない」と強い調子で迫るのである（Habermas [1969]2008d: 200）。

しかし、規制の強化は、学生たちに対する批判では終わらなかった。それは、大学の民主化の構想の修正に及んでいる。ハーバーマスは、大学の民主化の要求を撤回したわけではないが、「左翼ファシズム」発言を境に、大学における共同決定の限界を強調するようになる。たとえば、彼はメルクーア誌に 1969 年 7 月に掲載された「大学の民主化——科学の政治化？」で、次のように述べる。

> 学生（および助手）の共同決定は集団間に存在する能力の差にその限界がある。ここで能力とはむろん、大学政治の一般的な問題における能力のことではなく、専門能力のことである。したがって、能力の差は、招聘、大学教授資格、研究員の任用で考慮されなければならない。（Habermas 1981a: 192）

このような修正は、大学という組織に限定されてはいなかった。1968 年 10 月、ズーアカンプ社で編集者たちが発行者ジークフリート・ウンゼルトにつきつけた共同決定の要求を、ハーバーマスはウンゼルトの側に立ってはねつけている（Müller-Doohm 2014: 205-8）[12]。

このように、共同決定の構想の修正が大学という組織に限定されず、他の組織にも及んでいたとすると、問題は大学の民主化に限定されなくなる。むしろ、組織内の公共性への私人の参加という『公共性の構造転換』以来の構想が、見直しを余儀なくされていたと言えよう。

組織内の公共性への私人の参加という構想が揺らいでいたとすると、『公共性の構造転換』（1962 年）が直面していた問題へとハーバーマスは投げ返される。ハーバーマスは、別の回答を検討しなければならない。実際、ハーバーマスが「左翼ファシズム」発言の後に立って

---

[12] ミュラー・ドゥームは、この出来事について次のようにまとめている。「堅実な出版社であったズーアカンプ社でも、権威つまり発行者に対する異議申し立て運動が発生する。…「編集者規則」は、全編集者の集会が出版予定だけでなく、販売、宣伝、報酬、人事等についても決定することを企図する。…ハーバーマスも、他の者と同様に、10 月 15 日の朝まで続いた話し合いで発行者の側に肩入れしていたのは、明白である。彼は数日前に決算書を見せてもらい、所有関係を確認していた。ハーバーマスには、ラインハルト家が出版社の社会化に決して同意しないのは、明らかであった。ラインハルト家は出版社を引き継ぐために必要となる資金をウンゼルトに貸し出していたし、ウンゼルトはラインハルト家と個人的な信頼関係を結んでいたのである。ハーバーマスの結論は、ズーアカンプ社のような私的な出版社が集合的な経営管理を行うことは、所与の経済的条件のもとでは現実的でないということである」（Müller-Doohm 2014: 205-7）。

いた地点は、ここであったと考えられる。その後の理論展開は別の回答の模索として理解することができるからである。ハーバーマスは『コミュニケイション的行為の理論』（1981 年）で、生活世界とシステムの二元論を提示する。この二元論は、国家と社会の二元論の刷新したものと考えられる。『公共性の構造転換』（1962 年）は、国家と社会の二元論の失効を踏まえるという否定的なかたちではあるが、なおもこの二元論の地平にとどまり、公論の可能性を模索していた。これに対して、生活世界とシステムの二元論は、旧来の二元論の地平を離脱し、新しい地平のもとでデモクラシー論を再構築することを可能にした。『事実性と妥当性』（1992 年）はまさに、この再構築の成果であった。

「左翼ファシズム」発言を頂点とした経験は、その理論的背景へと反作用し、組織内の公共性への私人の参加という構想の見直しを余儀なくし、国家と社会の二元論の刷新へと転回する契機となったと考えられるのである。

5．まとめ

ハーバーマスの「左翼ファシズム」発言が彼のデモクラシー論によってどのように基礎づけられていたか、またこの発言を頂点とする経験が逆に彼のデモクラシー論にどのような影響を及ぼしたか。以上の問いに対して、本稿は次のように答えたことになる。「左翼ファシズム」発言は、組織内の公共性への私人の参加という構想によって、さらに「自発的で活動的な悟性」を「規制された狂気」とする哲学的見地によって、理論的に基礎づけられていたと考えられる。また、「左翼ファシズム」発言を頂点とする経験は、組織内の公共性への私人の参加という『公共性の構造転換』以来の構想の見直しを促し、国家と社会の二元論の刷新へと転回する契機になったと考えられる。

本稿にはむろん、多くの限界がある。まず、本稿は、本稿では十分には論証されていない、いくつかの前提に基づいている。たとえば、ハーバーマスのデモクラシー論の基礎にはシェリングに由来する哲学的見地があるといった前提である。こうした前提の妥当性は別途、論証されなければならない。ただし、本稿の主張が説得的であるなら、遡及的にその論証の一部がなされたことになるであろう。

また、本稿が光を当てたのは、複雑に絡まりあっている幾多の経路のひとつに過ぎない。「左翼ファシズム」発言がもっぱら上のような理論的背景から発せられたわけではないだろう。国家と社会の二元論を刷新する方向への転回も、この発言を頂点とする経験にもっぱら由来するわけではないだろう。転回は、何よりルーマンとの論争を経た、社会システム論の批判的受容と切り離して考えることはできない。本稿は、この批判的受容にいたる前段階を、言うなれば一里塚のひとつを明らかにしたに過ぎない[13]。

---

[13] ルーマンの社会システム論の批判的受容も、それ自体、幾多の経路が絡まりあい交差するなかにある。それは、本稿の明らかにしてきた経路、すなわち『公共性の構造転換』に由来するデモクラシー論の

しかし、こうした経路に光を当てたことには、次の意味があろう。まず、「左翼ファシズム」発言の「合理性」を理解することが可能となる。暴力をあからさまに訴えるものではなかったドゥチュケの立場に対して「左翼ファシズム」と応答することは、「合理性」を欠くとの印象を与えても不思議ではない。だが、本稿で見てきたように、発言の背景にデモクラシー論とその基礎となる哲学的見地を見通すなら、そこには一定の「合理性」を確認できよう[14]。また、ハーバーマスのデモクラシー論のミッシング・リンクの発見に貢献する。『コミュニケイション的行為の理論』は『公共性の構造転換』とは別の地平――生活世界とシステムの二元論――を用意し、『事実性と妥当性』におけるデモクラシー論の再構築を準備した。本稿は『コミュニケイション的行為の理論』が別の地平を用意するにいたった経緯の一端を明らかにしたことになる。すなわち、『公共性の構造転換』の最終的な回答、すなわち組織内の公共性への私人の参加は、異議申し立て運動の展開のうちに挫折したと考えられるのである。『コミュニケイション的行為の理論』における生活世界とシステムの二元論の導入は、ルーマンの社会システム論の批判的受容を不可欠の前提にしているが、本稿はこの批判的受容が必要になった、少なくともひとつの理由を明らかにしたと言うこともできよう。

ハノーファーの集会の翌年、1968 年、ドゥチュケは西ベルリンで銃撃され重傷を負う。翌 1969 年、テオドール・W・アドルノが亡くなる。さらにその翌年には、アドルノの学生でもあったクラールが自動車事故で不慮の死をとげる。異議申し立て運動の時期は足早に過ぎ去って行った。ハーバーマスもまた、1971 年、ベルリン自由大学とともに運動の拠点であったフランクフルト大学を去り、バイエルン州シュタルンベルク湖畔のマックス・プランク研究所に籍を移した。ハーバーマスは、1979 年、ハノーファーの集会から 12 年後、「左翼ファシズム」発言を「いささか場違いな発言」と回顧し（Habermas 1981c: 519）、さらに翌年、フランクフルト大学に戻る前年、ドゥチュケにささげた追悼の辞――彼は銃撃で負った傷が遠因となり 1979 年のクリスマスイブに 39 歳で亡くなった――で彼を「本当の社会主義者」と呼ぶことになる（Habermas 1981b: 304）。ドイツ赤軍のテロリズムに揺れたドイツの秋をこえて、この回顧にいたる道程は、本稿の範囲をこえるであろう。稿をあらためて論じることにしたい。

異議申し立て運動における蹉跌という経路の延長線上にのみあるわけではない。それは少なくとも、理論の水準ではハンス・ゲオルク・ガダマーの解釈学に対する批判と密接に関連しており、それとの連関において捉えられなければならないだろう。さらに、それは、異議申し立て運動以後のドイツ赤軍によるテロリズムとそれに続くドイツの秋の経験との関連において、より良く理解されうると考えられる。とくに後者については、別稿を期したい。

[14] ハーバーマスは、1979 年になっても、「別の言葉で表現すべきであった」としながらも、「以前と同様に発言の内容は正しかったと考える」としており、なお内容の正しさには自信を示す（Habermas 1981c: 519）。この自信は、本稿で明らかにした発言の「合理性」から、少なくとも部分的には理解することできよう。

＊本研究は科学研究費基盤研究（C）「中期 Habermas の社会学理論におけるデモクラシー思想の解明」の研究成果の一部である。

文献

Bergmann, Uwe Red., 1967, *Bedingungen und Organisation des Widerstandes: Der Kongreß in Hannover*, West-Berlin: Voltaire Verlag.

Dutschke, Rudi, 1967, “Rudi Dutschke,” Uwe Bergmann Red., *Bedingungen und Organisation des Widerstandes: Der Kongreß in Hannover*, West-Berlin: Voltaire Verlag, 78-82.

Habermas, Jürgen, [1962]1990, *Strukturwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. （細谷貞雄・山田正行訳，1994,『［第 2 版］公共性の構造転換――市民社会の一カテゴリーについての探究』未來社.）

――――, 1963a, “Dialektischer Idealismus im Übergang zum Materialismus: Geschichtsphilosophische Folgerungen aus Schellings Idee einer Contraction Gottes,” *Theorie und Praxis: Sozialphilosophische Studien*, Neuwied am Rhein und Berlin: Hermann Luchterhand, 108-61.（細谷貞雄訳，1999,「唯物論への移行における弁証法的観念論――「神の収縮」というシェリングの思想からの歴史哲学的推論」(『理論と実践――社会哲学論集』未來社，159-246).）

――――, 1963b, “Zwischen Philosophie und Wissenschaft: Marxismus als Kritik, ” *Theorie und Praxis: Sozialphilosophische Studien*, Neuwied am Rhein und Berlin: Hermann Luchterhand, 162-214. （細谷貞雄訳，1999,「哲学と科学の間――批判としてのマルクス主義」(『理論と実践――社会哲学論集』未來社，247-325).）

――――, [1969]2008a, “Universität in der Demokratie: Demokratisierung der Universität,” *Protestbewegung und Hochschulreform*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 108-33.

――――, [1969]2008b, “Rede über die politische Rolle der Studentenschaft in der Bundesrepublik,” *Protestbewegung und Hochschulreform*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 137-46.

――――, [1969]2008c, “Diskussionsbeiträge,” *Protestbewegung und Hochschulreform*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 137-46.

――――, [1969]2008d, “Die Scheinrevolution und ihre Kinder,” *Protestbewegung und Hochschulreform*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 188-201.

――――, 1981a, “Demokratisierung der Hochschule: Politisierung der Wissenschaft?(1969),” *Kleine politische Schriften I -IV*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 186-96.

――――, 1981b, “Ein Wahrhaftiger Sozialist(1980),” *Kleine politische Schriften I -IV*,

Frankfurt am Main: Suhrkamp, 304-7.

————, 1981c, “Mit Detlef Horster und Willem van Reijen(1979),” *Kleine politische Schriften I -IV*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 511-32.

Holub, Robert C., 1991, *Jürgen Habermas: Critic in the Public Sphere*, London and New York: Routledge.

飯島 祐介，2019,「Ｊ・ハーバーマス『公共性の構造転換』のシェリング主義的基礎――「進歩の消滅」のもとで実践的であることの可能性」『社会学史研究』41: 59-75.

Keulartz, Jozef, [1992]1995, *Die verkehrte Welt des Jürgen Habermas*, Hamburg, Junius.

Matuštík, Martin Beck, 2001, *Jürgen Habermas: A Philosophical-Political Profile*, Lanham: Rowman & Littlefield Publishers.

Meschkat, Klaus, 1967, “Meschkat, Klaus,” Uwe Bergmann Red., *Bedingungen und Organisation des Widerstandes: Der Kongreß in Hannover*, West-Berlin: Voltaire Verlag, 14-5.

Müller-Doohm, Stefan, 2014, *Jürgen Habermas: Eine Biographie*, Berlin: Suhrkamp.

Müller, Hans Dieter und Günther Hörmann, 1967, *Ruhestörung* (Dokumentarfilm), Institut für Filmgestaltung an der Hochschule für Gestaltung Ulm.

Negt, Oskar, [1968]2016, “Revolution und Geschichte: Eine Kontroverse mit Jürgen Habermas, ” *Politik als Protest: Reden und Aufsätze zur antiautoritären Bewegung*, Göttingen: Steidl, 90-105.

Specter, Matthew G., 2010, *Habermas: An Intellectual Biography*, New York: Cambridge University Press.

Wiggershaus, Rolf, 2004, *Jürgen Habermas*, Hamburg: Rowohlt Taschenbuch.